

特集 多賀絵馬通りの景観と色彩を考える

滋賀県多賀町にある多賀大社は、年間約160万人もの参拝者が訪れる県内でも有数の観光地です。その門前町にあたる絵馬通りでは、通りの商業活性化を目的として道路改良工事が実施され、路面のモザイクタイル舗装に、朱色の灯ろう(街路灯)と朱色の防護柵、ベンチ、スツール(いずれも金属製)が整備されました。工事は平成29年度以降も続き、絵馬通り全体に整備される予定です。



これにはさまざまな意見がありますが、門前町の景観保全と価値の向上・活性化の

両立の観点から、「色」に注目して特集します。

なぜ景観に色彩が大切なのか

平成16年に景観法が施行され、多くの自治体で景観計画が策定されました。この景観計画では建物や広告物の色彩の基準が設定され、ガイドラインとして運用されています。特に、京都や鎌倉などの都市や、伝統的なまちなみを整備した地区では色彩の基準が細かく設定されています。それは、色彩が人間の視覚に強い影響を与え、心理にも影響するからです。

具体例を、多賀絵馬通りで見してみましょう。写真1は、現在の絵馬通りの景観です。伝統的和風建築の邸宅で和風カフェが営業されていますが、その前に朱色の金属製の灯ろうと防護柵(いずれも照明付)とスツールが設置されました。写真を加工して朱色の灯ろうを消したのが写真2、さらに防護柵とスツールも消したのが写真3です。

3つの写真を比べると、写真3では建物と門、板塀と刈り込まれた庭木が全体としてはっきりと見え、統一されたすがすがしさ、美しさを感じます。しかし、写真2では朱色の防護柵とスツールに視線がひきつけられ、違和感を感じます。それでも建物や塀の部分は遮られることなく美しい景観を保っています。ところが、写真1では建物と門の前に灯ろうが一本立っただけで、朱色の灯ろうに注意がひきつけられ、背後の景観が遮られたように見えにくく感じます。

このような色の効果は「騒色」といわれます。



写真1 絵馬通りの現況



写真2 灯ろうを消去



写真3 全てを消去

次ページの写真4は、絵馬通りの商店の前です。写真1と同じように朱色の灯ろうと防護柵、ベンチが設置されていますが、背景の店舗に赤や黄が多用されているため、雑然とはしているものの、あまり違和感を覚えません。

周辺に飲食店や小売店、娯楽施設が並び繁華街の場合は、「赤」や「黄」が多用され、気持ちを前向きにさせる、興奮を促す、食欲を増進させるといった色彩感情が既に喚起されていることから、違和感を感じる



写真 4 絵馬通り商店の前面の現況

ことなく、逆に活気を感じることが多くなります。これは、お祭などの非日常の行事に赤や黄が大量に用いられることと共通しています。

カラー・コンディショニング、 スーパー・グラフィックスの流行

「赤」は「活力、興奮、暖かさ」を感じさせ、「青」は「平穩、冷静、涼しさ」を感じさせるという心理的効果（色彩感情）を科学的に応用し、ホテル、駅などの公共空間や電車、航空機などの内外装、オフィスの床などの人間環境に適用したのが「カラー・コンディショニング（色彩調節）」という手法です。日本では1950年代以降に普及しました。

一方、こうした科学的ではあっても単純で画一的な手法を批判して「スーパー・グラフィックス」が生まれ、1970年代から流行します。タイポグラフィやグラフィックデザインを応用し、巨大なスケールでカラフルでグラフィックな表現をして都市の景観を作り出します。最近では、デジタルサイネージやプロジェクションマッピングにも使われています。



これらの技法は、科学的であれ、芸術的であれ、人が意図的に作り上げたもので、都市型の景観形成といえます。そして、地方都市にも波及していきました。

環境色彩計画の登場

こうした流行に対して、地域固有の景観や色彩を生かしたまちづくりを主張したのが、「環境色彩計画」です。1977年、J・P・ランクローは、フランスの歴史的な景観をもつ町には、地域ごとに異なる地方色が存在することを発見し、地方色をいかしたまちづくりを提唱しました。元来、古いまちなみの色彩は、地域の自然の材料を皆が使い、使用頻度が増すことで自然に統一されてきたもので、伝統的な材料を使い続けているかぎり色彩に大きな変化は生じません。しかし、現代のように多くの新建材が開発され、色彩や質感も形も全く異質なものが自由に建物に使われるようになると、統一感が失われ、雑然としたまちに変貌してしまいます。これに気づいた自治体は、景観計画の中に「環境色彩計画」の手法を導入して美しいまちなみの再生へと誘導しています。

「環境色彩計画」では、次の点を重視しています。

- ① 色彩調査により、地域の特色や個性を把握して、ふさわしい色彩を見つけ出す。
- ② 既にあるものの役割や特性ごとに色彩を検討し、かつ環境全体のバランスを考えて、色彩を順序づけ、配色等で調和させる。
- ③ 地域の多くの人に受け入れられる慣れ親しんだ色を使う。「騒色」を取り除く。過剰な色の氾濫を避ける。自然の色を大切にし、低彩度から中彩度の色を用いる。
- ④ 市民参加を促進する。住民に自分たちが景観を形成しているとの意識を持ってもらう。

朱色の灯ろうと環境色彩計画

あらためて、朱色の灯ろうと周辺環境との調和について考えてみましょう。

朱色の灯ろうが立ち並ぶ神社・仏閣では、多くが参道に奉納されていて、背景は緑の樹木です。参道わきに緑と朱の2色で構成されるため、違和感がなく、みずみずしい生命感が強調されます。（写真5）



写真 5 鞍馬寺参道